

シエイクスピアの或る場面の翻譯について

和田正美*

I

半世紀も前の文章であるが中村光夫はその「翻譯文學の問題I」の中で、イプセンの戯曲『ヘッダ・ガブラー』が翻譯劇として上演されるのを観た正宗白鳥と小林秀雄の感想を紹介してゐる。それによると二人とも舞臺の上の俳優の翻譯調の臺詞に幻滅し、正宗白鳥はそこから出發して次のように述べたのであるといふ。

西洋の名作の翻譯を讀むと、いつもさう思ふのだが、男女の會話が日本語であるのが邪魔になるやうな氣がする。日本語であるため、外國の作中の人物も我々に親しまれていゝ筈であるのに、いろいろな日本語の綾が原作の妙味を排除してゐるやうな氣持がする。イプセンの戯曲などだと、殊にさう感ぜられる。ヘッダのセリフは殊に

さうだ。ヘッダの言葉は、日本の翻譯語よりも、もつときびしく冴えてゐるものではあるまいか。(傍點、和田)

これは觀劇體驗を讀書體驗にまで押し擴げたものであり、西洋の名作の會話の部分は日本語の綾に邪魔されて妙味がそこなはれてゐるといふ、ほとんど翻譯といふ行爲の否定に近い主張であるが、中村光夫も指摘してゐるように、これを裏返せば、戯曲であれ小説であれ臺詞を翻譯する際にはもつと工夫がこらせないものかといふ焦立ちがそこにあるといへよう。

一方、小林秀雄の不満とそれに基く提言は正宗白鳥の一步先を進んでゐるやうに思はれる。小林の見解を中村の要約に頼つてまとめると、それは以下の如くなる。

小説その他の散文と違つて「劇の翻譯は、詩の翻譯と同様、一種格別な翻譯の苦心を要求してゐる筈のものが、今日迄西洋近代劇は、恐らく散文並みの翻譯を通じて紹介されて來た」のであり、戯曲は「どんなに散文化されても臺詞は散文にはならない。俳優の内聲に乗り一種の歌として聞えて來なければ、その本當の意味は現はれる筈がな」く、だから戯曲は詩と同質である。さう考へると「翻譯臺本に、演出家特に俳優諸君の協力により、イプセンの精神を推察して、大膽な意譯翻案が行はれなければ、翻譯劇の前途は暗い」のである。(傍點、和田)

以上のことからわかるやうに、ここにあるのは、正宗白鳥、小林秀雄といふ二つの文學精神が翻譯劇の臺本の非文學性に腹を立て、中村光夫

といふもう一つの文學精神がそれに同調した眺めである。これらの批判に對して演出家や俳優が何等かの反論をしたのかどうか私は詳かにしないが、冒頭に記した通り、これは五十數年前のことであり、翻譯劇の在り方をめぐる文學者達の不満はそのままの形では現代の状況に當て嵌まらないかも知れないであらう。私達はここ五十年の間における翻譯技術の格段の進歩を忘れるべきではない。しかしそれなら正宗と小林と中村が『ヘッダ・ガブラー』の臺詞に覺えた感慨はもはやその效力を完全になくしたのかと言へば、私にはどうもさうとは思へないのである。

自分のことを書くと、私は翻譯劇が舞臺で上演されるのを観ることは稀にしかないが、それを活字で讀むことは時々ある。私の讀み方は小説を讀むのとほとんど同じであり、筋を追ひながら讀んで行くのだが、よく考へると、これでは戯曲を戯曲として扱つたことにはならないであらう。劇であるからには筋よりも登場人物の臺詞の一つ一つに注意が拂はれて然るべきである。それに引きずられる形で彼等の顔の表情や體の動きを思い浮べることが出来ればもつとよい。

しかしその私にしたところで不自然な臺詞につまづいて、翻譯者は原文に忠實な翻譯を心掛けたつもりなのだらうが、これでは日本語になつてゐないとか、その逆に日本語の情調に押しつぶされてゐるとか、このシチュエーションにこの言葉はふさはしくないとか感じることをなしとしない。さういふ場合には「日本語の綾」(正宗白鳥)を逆用して「大膽な意譯翻案」(小林秀雄)を行つて見たらどうなのだらうと考へたりする。再び小林秀雄の言葉を借りると、劇の臺詞はたとひ活字で讀んでゐても、「一種の歌として聞えて來なければ」ならない筈のものではないか。

2

右のやうなことを考へてゐた折しも私はシェイクスピアの『ヘンリー四世』を小田島雄志譯で讀む機會を得た。この戯曲についての私の豫備知識はわづかなもので、これはフォールスタフと稱せられる陽氣な遊び人がロンドンの巷に出入りする王子と組んで無頼の限りをつくす話だといふ位のことしか知らなかつたが、それでも或る場面に會ふことを樂しみにしながら讀み進めた。國王のヘンリー四世に對して叛亂軍を組織した聖職者と大貴族達が某所で敵軍に際會し、敵將の言葉巧みな和解の求めに應じるが隙に乗じられて捕へられ殺される、といふのがその場面のストーリーである。

物語の主筋からは離れたこの場面のことを私が知つたのはシェイクスピアを通してではなく、某氏が近代日本について論じた文章によつてだつた。その論の核心はポツダム宣言である。いふまでもなくこの宣言は大戦の末期に連合國の諸政府が日本國政府に降伏を要求したものであるが、その第五條に「吾等ノ條件ハ左ノ如シ」とあることから明らかなる通り、これは政府と政府の間で「條件」を介して行はれる彼我對等の取引きだつた。しかし日本側がポツダム宣言を受諾すると、あつといふ間にそれは無條件降伏にすりかへられ、日本國政府は單なる名のみ存在へ蹴落されたのであるといふ。

某氏はその經緯について説きながら、自説を補強するものとして、以前に學習した『ヘンリー四世』の問題の場面を引用したのである。私はそれを讀んで、興奮したと言ひたくなるほど感動し、誰かが書かなければならないことをかうしてシェイクスピアが書いておいてくれたのかと

の感慨を覺えた。

さて、この場面が小田島雄志譯として再び姿を現した時——私は失望した。何と力のない、つまらない翻譯なのだらうと思つた。以前の感動は何だつたのだらうといふ氣がした。

そんな筈はないといふ心持から、小田島譯に先行する坪内逍遙譯と中野好夫譯を讀んで見たところ、多少救はれたやうに感じ、兩者との對比において小田島譯のいいところも少しはわかつたやうに思へた。しかしその先はなかつた。私が某氏の引用文に接した際の、はつとするやうな驚きは、以上三つの翻譯のどれからもよみがへりはしなかつた。

この小論の着想に思ひ當つたのはその時である。

とはいへここではつきり言つておかなければならないことがある。それはこの問題で翻譯者にばかり責任を負はせるのはおそらく、いや、明らかに誤りだといふことである。私が某氏を介してシェイクスピアの一場面に目を通したのは、ポツダム宣言といふ連合國のペテンに引つかかつた祖國日本の非運を強く意識しながらさうしたのであつて、シェイクスピアをシェイクスピアそれ自體として讀んだわけではなかつた。その意識がもしなければ感動はほどほどだつたであらう。

そればかりではない。フォールスタフとハル王子の亂行を中心とする『ヘンリー四世』の物語は私にさほどの興味を感じさせなかつたので、それだけに尙更、やがて出て来るであらう既知の場面に期待を寄せ過ぎたといふことはあつただらうと思はれる。

最後に、これは私の甚だしい矛盾を示すものであるのだが、書き落とすわけには行かないので書くとする、近代日本の運命に關する某氏の論考の中で引用されたシェイクスピアは中野好夫譯だつたのである！同じ中野譯に最初はいたく感動し、二度目には感動が乏しいと言ひ募る

のは無茶苦茶な話であり、自分でもひどいと思ふが、このことに徴しても、私におけるポツダム宣言効果はそれほど大きかつたのだと言ふよりははない。

奇妙な經驗をしたものである。しかし傍目にはこれがどう見えようと、私にとつてはかつての感動も現在の不満も心理的現實である。この現實から出發して翻譯の問題を追求することは出来ないのか。私はさう考へて三つの翻譯を比較檢證し、私なりの對案を示すことにしようと思ふに至つた。

3

ここまで述べて來た場面は『ヘンリー四世』第二部の第四幕第二場である。この場面の内容をもう少し詳しく記すことが必要であらう。

ゴールトリの森で國王軍と叛亂軍が對峙する。國王軍を構成するのはヘンリー四世の王子の一人であるランカスター公ジョン、ウェストモランド卿、その他であり、一方、叛亂軍はヨーク大司教、モーブレイ卿、ヘイスティングス卿、その他である。兩軍の間で話し合ひが持たれ、ランカスター公はヨーク大司教に、神の代理人として人民を教導した貴方がかういふ暴舉に出ることは理解に苦しむと嘆く。大司教はそれを受けて、自分達の鋒起は暴舉ではなく義舉であると言ひ、國王の政治の進め方に不平不満をぶつける。ランカスター公はそれを聞き、大司教の言ひ分は一々もつともなので自分が必ず是正しよう、ついではこの場で和解しないかと申し出る。叛亂軍側は喜ぶが、モーブレイ卿だけは、何か胸騒ぎがすると言ひ出す。しかし彼は敵からも味方からも、いいことがある前にはさういふ氣がするものだと言ふ。ランカスター公は和解の

前提として兩軍を解散させるべきだと主張する。その言葉に従って叛亂軍は、ランカスター公が見てゐる前で解散する。その後、どんでん返しが起るのである。

事柄の順序としてシエイクスピアの原文を掲げなければならぬが、第四幕第二場のすべてを示す氣はない。そんなことをしたら長くなり過ぎて讀者に迷惑が掛る。ランカスター公が自軍がまだ解散してゐないことをたしかめたところへヘイスティングズ卿が戻つて来る場面から引用することにしよう。尚、原文は勿論一續きのものであるが、便宜上それを幾つかの部分に分けておくことにする。

A

Re-enter HASTINGS.

Hast. My lord, our army is dispersed already :

Like youthful steers unyoked, they take their courses

East, west, north, south; or, like a school broke up,

Each hurries toward his home and sporting-place.

B

West. Good tidings, my Lord Hastings; for the which

I do arrest thee, traitor, of high treason :

And you, lord archbishop, and you, lord Mowbray,

Of capital treason I attach you both.

Mowb. Is this proceeding just and honourable ?

C

West. Is your assembly so ?

Arch. Will you thus break your faith ?

Lan. I pawn'd thee none :

I promised you redress of these same grievances

Whereof you did complain; which, by mine

honour,

I will perform with a most Christian care.

But for you, rebels, look to taste the due

Meet for rebellion and such acts as yours.

Most shallowly did you these arms commence,

Fondly brought here and foolishly sent hence.

Strike up our drums, pursue the scatter'd stray :

God, and not we, hath safely fought to-day.

Some guard these traitors to the block of death,

Treason's true bed and yielder up of breath.

[*Exeunt.*]

4—A

叛亂軍のヘイスティングズ卿が自軍解散の様子を傳へるこの箇所は誰が翻譯しても同じやうな文になるだらう。三つの翻譯を示すと、それは次の通りである。

閣下、我軍は既に退散しました。軛を脱はなされた若駒のやうに、東西

南北へと走つて行きます。又は小學校の放課時といふ風で、めい
く家路へと、遊び場所へと。(逍遙譯)

閣下、わが軍はすでに解散いたしました。軛を解かれた若牛同様、
東へ西へ、南へ北へと、めいめい、思いのままに散じてしまいまし
た。放課後の児童にも似て、それぞれ家路へ、また遊び場へと、急
いでまいったものと存じます。(中野譯)

大司教閣下、わが軍はすでに解散しております、頸木を解かれた
若駒同様、東へ西へ、南へ北へ、思いのままに散っております。あ
るいは放課後の小學生同様、それぞれの家に、遊び場に、いそいで
おります。(小田島譯)

これでわかるやうに小田島は My Lord を「大司教閣下」と譯して
る。私にはこの My Lord は自軍の大司教ではなく敵軍のランカスター
公を指すのではないかと思はれるが、これは私が間違へてゐるかも知
れないので、この問題は追求しないことにしよう。

私としてはこの三通りの翻譯に異議はない。逍遙が「解散」と譯さな
いで「退散」と譯したことはどうかといふ氣もするが、これは目くじら
を立てるほどのことではないだらう。この箇所を翻譯を私が試みたとし
ても以上の三つを折衷したものにならざるを得ないのだが、それでも一
つだけ言つておきたいことがある。

それはヘイスティングス卿のこの臺詞は卿自身の喜びと兵士達の喜び
を同時に表すものであるべきだといふことである。喜びは二重のそれ
でなければならぬ。さう考へて、臺詞の終りのところに、「それはうれ

しさうでした」といふ一文を挿入したらどうか、そして演出家は俳優に
これを發聲する時には特に注意するやうにと指示したらどうか、といふ
のが私の案である。私が演出家であれば、さもうれしさうに相好を崩し
てしゃべるやうにといふ指示を出すかも知れない。

4-B

ウェストモランド卿は態度を一變させて、三人の叛亂主謀者の逮捕を
宣告する。逍遙譯では卿の臺詞の次に、「兵士ら群至して三人の武器を
取り上げる」といふト書が入るが、事實その通りであらう。問題はこ
措置に對抗するモーブレイ卿の臺詞の譯し方である。

逍遙はそれを、「さういふことをなすつて、それで公明正大といへま
すか？」と譯し、小田島は、「ええい、これが公明正大なやりかたか？」
と譯してゐるが、私にはピンと來ない。自分のしてゐることが公明正大
でないことを百も承知の人に向つて、かういふ言葉をぶつけたところで、
何の迫力もないからである。

なるほど Is this proceeding just and honourable? を普通に譯せば
逍遙譯や小田島譯のやうになる。しかし極言すれば、翻譯者は時に應じ
て原文に反抗してもよいのではないだらうか。息子が離れて暮す母親に
書き送る手紙の冒頭に My dear mother と記されてゐるからといつて、
これを「我が親愛なる母上」とか「僕の親しいお母さん」とか譯すには
及ぶまい。單に「お母さん」と譯せば充分であらう。勿論 Dear をこ
さら譯出する不自然なやり方がかへつて新鮮な効果を生む場合があるこ
とは否めないけれど。

右に原文への反抗と書いたが、よく考へるとこれは反抗でも何でもな

い。英語ではすんなり通用する會話もそれをそのまま日本語に移し替へた形では會話として成立たないことがあるだらう、當然その逆もあるだらうといふことを考へたまでである。英語圏の人々が母親に話し掛ける時、*dear*の語は口を衝いて出るのかも知れないが、日本語の「親愛な」や「親しい」はさうではない。翻譯者はさういふ言語習慣の相違、引いてはその背後にある心の動き方の違ひに注意してもらひたいといふのが私の註文である。

先方の理不盡な仕打ちに、「これが公明正大なやりかたか」と應じるのは私には泣きごとめいて聞える。もつときつぱり、「公明正大といふことを忘れたのか」とやり返す方がこの場にふさはしいのではないだらうか。

一方、中野譯はこの箇所を、「おのれ、これが武人の正しい道だともいふのか」と表してゐる。この方が逍遙譯と小田島譯よりいいと思ふが、この臺詞にはあまり力がないし、武人といふ言葉の日本的な響きも多少氣に掛る。翻譯者は言語習慣の相違に注意すべきだといふ前言にこれは決して矛盾するものではないと信ずるが、外國の作品を翻譯するのなら譯語をなるべく和臭から遠ざけた方がいいやうに思はれる。

『ヘンリー四世』はイギリスの、すなはちヨーロッパの作品であるのだから私は中野譯の武人を騎士にかへて、一旦、「これが騎士のすることか」といふ譯文を作成したが、これを劇場で聴くと何のことかわからないおそれがあるといふ氣がしたので、アクセントをつけて、「これが男のすることか。騎士たるものすることか」と譯し直して見た。

これに對するウェストモランド卿の返答はモーブレイ卿の臺詞の中に「公明正大」が含まれてゐるのならそれを、「騎士」の語が含まれてゐるのならそれを逆手に取つたものになるが、このことについては後に試譯

として示すことにしたい。

4-C

ヨーク大司教はランカスター公の背信をなじる。公は二枚舌を使つてそれに應酬する。これによつて始まるランカスターの長めの臺詞の翻譯は勝者の傲りとそれに伴ふ敗者への侮蔑嘲笑をたつぷり感じさせるやうに工夫することが望ましいであらう。

ところで大司教の *Will you thus break your faith? the faith* を三人の翻譯者は申し合せたかの如く「誓約」と譯してゐる。「かうまで誓約をお破りなさるか?」(逍遙譯)、「かうして誓約をさへ破ろうとされるのか?」(中野譯)、「かうして誓約を破られるのか?」(小田島譯)。

私は思ふのだが「信義。信賴。信仰」といふ意味を背後に持つ *faith* と *promise* の間の隔たりはかなり大きいのであらうが、「誓約」は「誓つて約す」であり、これと「約束」の隔たりはそれほど大きくないのではないか。さうだとすればこの箇所は譯語を「約束」に統一し、「誓約」の「誓」は「誓ふ」といふ形で獨立させたらどうだらう。

私は大司教の臺詞を、「信義に基いて固く誓ふと言つておきながら、その約束を破るおつもりか」と譯して見ることにする。(ちなみに小田島譯の「破られる」は敬語の使ひ方に締まりがない。)そしてランカスター公には、「約束などした覚えはない。いや、約束といへば——とは言つた」としやべらせるのである。かうして「約束」の語を軸にした方が會話は滑らかに進んで行くやうな氣がする。

◆ ◆ ◆
ランカスター公は叛亂の主謀者達を嚴罰に處することを申し渡した後、

彼等における用兵の拙劣さを愚弄する。私にとつてこの箇所は手ごはいのでシエイクスピアの原文をもう一度引用して、それに逐語譯をつける」と「Most shallowly did you these arms commence」は「お前達は浅はかにも兵を起した」Fondly brought here and foolishly sent hence は「兵士達は愚かしくもここまで連れて來られ、馬鹿らしくも歸らせられた」でよいだらうか。

三つの副詞 shallowly, fondly, foolishly の對比が目につくけれど、逍遙はこの臺詞を、「事を起したのが既に愚擧であつたのだが、うっかり出陣して、うっかり解散するとは、いよく愚な話であつた」と譯してゐる。副詞は「愚擧」、「愚な話」として名詞化されたわけである。fondly と foolishly はこの文脈では同意語であらう。

その點は中野譯も同じである。「それにいたしても、そもその蜂起からしてが淺慮至極。のこのこと出てまいって、あつさり解散などとは、いよいよもって阿呆千萬」。後述するやうに私の試譯の後半部分の中野譯に一番近い。

小田島譯は、「おまえたちが兵を起こすこと自體、淺はかというほかない。出陣してすぐ解散する愚かさには、あきれざるをえない」であるが、「あきれざるをえない」とは何事であらうか。私には誰かが「あきれざるをえない」と言ふのかつて聞いた記憶がないし、文章の中でそれを讀んだ記憶もない。こんな臺詞をしやべらなければならぬ俳優に同情したくなる。かういふ場合には、「あきれ物も言へない」とか「開いた口が塞がらない」とか言ふのが日本語の常識ではないか。

それはともかく私は shallowly を形容詞化して、「お前達は薄つぺらな戰爭を始めたものだ」と譯して見ることにする。そして fondly と foolishly は中野譯のやうに動詞から切離して獨立させるが、これは相

手を罵る「馬鹿者め！」としておきたい。かうすることによつてランカスター公の勝利の快感を讀者にも觀客にも、より強く印象づけることが出来るだらうと思ふからである。

ランカスター公は四散した敵兵の追撃命令を出す。この箇所の翻譯は誰が行つても、得られる譯文は同じやうなものであらう。ところで私はこの命令に、「一人でも生かしておくな」といふ一文を付け加へることにしたいと思ふのだ。

私の試譯は隨所に語句を補つてゐるが、そのことを認めてくれる讀者といへども、原文にはない文を挿入することには難色を示して、それは翻譯者の越權行為だと言ひ出すかも知れない。もとより私とてこれが冒險であることは承知してゐる。失敗したら物笑ひの種になるだらう。それならどうしてさういふことをするのかといへば、翻譯者の自由といふ假説に心が向ふからである。先に私は、翻譯者は原文に反抗することがあつてもよいといふ假説を提出して、すぐさまそれを修正したが、右に記した新しい假説はそれをさうたやすく修正する必要を認めない。

戯曲であれ小説であれ作品において、作者には作者の自由があり、讀者や觀客にも彼等なりの自由がある。創作者は一旦選んだ語句や文章を自由に捨てたり、その逆にそれを自由に選び直したりする。そして受容者はそのやうな營みの結果として呈示された作品をどう解釋しようとする自由である。であるとすればこの二者と對等の資格で作品の世界に參入する翻譯者にも自由があつてよいではないかといふのが私の主張である。

勿論、自由と恣意を混同してはならない。私は好き勝手なことをしろなどと言つてゐるのではない。創作者も受容者も翻譯者も作品の眞實性

に仕へることを要求されてゐるのであり、その限りにおいて自由が許されるだらうと言ひただけのことである。そこから離れる自由の如きに意味があらう筈はない。

敵兵を追へと命令したランカスター公に、「一人も生かしておくな」と續けてしやべらせることは、この貴公子の逸る心を際立たせることに役立ちはしないだらうか。そしてこの追加の臺詞は叛亂主謀者達の處刑命令の先觸れをなすといふ効果を持ちはしないだらうか。

ランカスター公はあつけない勝利を神の力に歸せしめる。私は、「今日の勝利は神の御業であつて、我等が力とは言ひ難い」(私の試譯)にランカスターの手放しの喜びを感じるので、前項と同じ考へから、これに、「ああ、よかつた」と付け加へて見たいのだが、このことには確信が持てない。シェイクスピアはキリスト教徒、といふよりはむしろ、キリスト教圏の人間がかういふ場合にさも言ひさうなことを王子に言はせたまふだといふのが正しい読み方であるとしたら、この「ああ、よかつた」は削除されて然るべきである。

ヨーク大司教とモーブレイ卿とヘイスティングズ卿は斷頭臺に送られることになる。この「斷頭臺に送られる」といふ受動表現に注目しておきたい。私はこれに違和を感じないが、「(彼等を)斷頭臺に送る」といふ能動表現にこれを變へると心の中に隙間風が入り込む。まして中野譯のやうに、「斷頭臺へと送ってやるがよい」とされると、誰が「送ってやる」のだらう、これでは主語が曖昧ではないかといふ、まるで嫁のあら探しをする姑のやうな氣持になる。

原文の Some guard of guard は命令動詞であらう。それならもつと

直截に、「斷頭臺に連れて行け」と譯したらどうなのか。

問題としてもつと大きいのは最後の一行 Treason's true bed and yielder up of breath の譯し方である。この文はいささか難解であるが、おそらく、「(斷頭臺は)叛逆した者が身を横たへるにふさはしい寢臺。その者はそこで息を引き取るのだから」といふ読み方でよいのだらう。事實、三人の翻譯者はこの読み方に従つてゐる。

この箇所の翻譯を、特に yielder up of breath がどう譯されるかを氣にかけながら調べると、逍遙は、「謀叛人の正當の臥床ねどこでもあり終焉所でもある斬首臺」と譯した。yielder up of breath には「終焉所」といふ散文的な譯語があてがはれてゐる。

中野譯は、「恰好のベッド、息の引き取り場所」であり、散文化の度は逍遙よりも進んでゐる。「息の引き取り場所」は日本語として合否すれすれといったところであらう。

しかし私はこの二つの翻譯には目をつぶるとしても、小田島譯の「反逆者の目を閉じさせるにふさわしい寢臺」には目をつぶることが出来ない。私の見るところ、これはすでに指摘した「あきれざるをえない」と同じく、意味は通じるが出番のない日本語である。合格點は到底つけられない。いや、大學受験生の英文和譯の答案ならこれでもよいのだらうが、舞臺の上で俳優にしやべらせる臺詞としては落第してゐると思ふ。第一、「目を閉ぢる」では必ずしも「死ぬ」ことにはならないではないか。この段落の中で私の使用した「目をつぶる」がこの文脈では「死ぬ」ことを意味しないやうに。

それではこの箇所をどう譯出すればよいのか。日本語は行爲の主體より、行爲が及ぼされる客體に重きを置く言語であらう。電車の車内放送で、「間もなくドアを閉めます」よりは「間もなくドアが閉まります」

の方が私の耳には自然に聞える。この観点からは叛逆の主謀者達が「死ぬ」ことに即した譯し方をしなければならないのだが、物は考へやうであり、日本語のやうに高度に發達した言語では必ずや逆の場合があるだらうと思はれるので、私はランカスター公の『殺してしまはう』といふ決意に密着して、「そこ（斷頭臺）に寝かせて息の根を止めてしまへばいいのだ」といふ試譯を作つて見た。

とはいへこのことで私に十全の自信はない。他にもつと適切な譯し方がありさうに思ふが、残念ながら今は思ひつかない。かういふ問題で一つのことをさういつまでも考へてはゐられないのである。

5

以下に私の試譯の全文を記すことにする。

A

ヘイスティングズ 閣下、我が軍はもう散り散りになつてをります。まるで軛を解かれた若駒のやうに、東へ西へ、南へ北へと進んで行きます。その姿は學校で一日の授業を終へた生徒に似てゐるとも申せませうか。めいめい我が家を目指し、遊び場を目指して急いでをります。それはうれしさうでした。

B

ウエストモランド さうか、それはよかつた。では、ヘイスティングズ卿、その方を國家叛逆罪で逮捕する。大司教、その方もだ。モーブレイ卿、その方もだ。二人とも大逆罪で逮捕させてもらはう。モーブレイ、その方もだ。二人とも大逆罪で逮捕させてもらはう。モーブレイ、な、なんだと。これでは騙し討ちぢやないか、これが男のすることか。騎士たるものすることか。

ウエストモランド ほう、それでは訊くが、烏合の衆をかたらつて叛亂を起すことが我々の騎士道にかなつてゐるといふのか。

C

大司教 信義に基いて固く誓ふと言つておきながら、その舌の根も乾かぬ内に、その約束を破るおつもりか。

ランカスター 約束などした覚えはない。いや、約束といへば、お前達が並べ立てた不平不満の數々を取り除かうとは言つた。それは確かだ。そのことなら、このランカスター、名譽に賭けて、またキリスト教徒の自分をもつくして、必ず實行して見せよう。しかし、それはそれ、これはこれだ。お前達は叛逆の大罪を犯した以上、それ相當の處罰を免れないぞ。

考へて見れば、お前達は薄つぺらな戦争を始めたものだ。ふん、手下の連中をのこのこ連れて來たかと思ふと、そいつらをあつさり解散させてしまふなんて。馬鹿者め。開いた口が塞がらないとはこのことだ。いいか、軍鼓を鳴らして、散らばつた奴らを追撃するのだ。一人も生かしておくな。それにしても今日の勝利は神の御業であつて、我らの力とは言ひ難い。ああ、よかつた。

さあ、この者どもを斷頭臺に連れて行け。國王陛下に叛逆を企てたこいつらにとつては斷頭臺が死の床なのだ。そこに寝かせて息の根を止めてしまへばいいのだ。

6

シエキスピアの研究者ではなくシエキスピア英語にも暗い私がシエキスピアの研究と翻譯に打ちこんだ三人の先輩に楯つくとは我なが

ら大それたことをしたものだと思ふが、このことで辯明しておく、私はこの小論をシェイクスピア學としてではなく翻譯の問題として書いてゐるのである。シェイクスピアはそのための手段に過ぎない。

譯出するに際して念頭に置いた一つのことは（私の試みがそれに當るかどうかはともかく）小林秀雄のいふ「大膽な意譯翻案」であるが、更にもう一つ、登場人物一人々々の身になつて、自分ならこの場合にはかう言ひたくなるだらうと思はれる語句や文章を補つて見た。さうすることとで原文の中にはない文章が譯文の中に登場する仕儀に立ち到つたことはすでに述べた通りである。私は自分が使ひ慣れてゐる日本語を通して、登場人物達を生き直して見ることを欲したので。

このやうにして得られた試譯を理想的な翻譯だと己惚れてゐるわけでは決してない。第一それは、右に記した補足作業の結果として、随分長くなつてゐる。舞臺での上演時間を考へれば、短い臺詞を長々と譯出することには問題がある、と言はれてしまふかも知れない。

一例を擧げると、Bの「ほう、それでは訊くが、烏合の衆をかたらつて叛亂を起すことが我々の騎士道になつてゐるといふのか」の原文は「Is your assembly so?」（お前達の軍事行動はそれ（公明正大）なのか）であり、三人の翻譯者はこの箇所をそれぞれ、「足下^{きみ}たちの暴擧が然^さういへるかい?」（逍遙）、「ならば、そもそもその方たちの蜂起は?」（中野）、「おまえたちの暴擧が公明正大と言えるか?」（小田島）と譯してゐる。私としては億萬分の一にもウェストモランド卿のやうな立場に立たされて、切つた張つたをしなければならぬのなら、かういふ言葉を口にするだらうと考へて譯出したのだが、こんなに長い臺詞は駄目だと言はれたら、引き下がるより他はない。

ところで翻譯の苦心談と言へるほど大袈裟なことではないが、私は

traitor と rebel をそのままの形で日本語に改めることはしなかつた。

叛逆者と叛逆人は日本語としてあまり坐りがよくないし、逍遙譯の叛賊は悪くないと思ふが、現代の讀者と觀客にはわかりにくいであらう。さうすると最後に残る譯語は謀叛人であるが、「武人↓騎士」の場合と同じく、この語の和臭が氣にかかつた。謀叛人と言はれると何か鎌倉時代的、室町時代的、明智光秀的なものをそこに感じて、これを使ひづらかつたのである。そこで私は traitor も rebel もことさら譯出しなくすむ場合にはそれを譯文の中から消去し、さうも行かない場合には、「國王陛下に叛逆を企てたこいつら」のやうな工夫をして見た。

とはいへ私はこのことで神經質になり過ぎてゐるのかも知れない。日常生活の中で神經質の度が過ぎる人は何處か間が抜けてゐるといふ、萬人周知の眞理を思ひ合せないではゐられない。それに私としたところでシェイクスピアのこれほど短い一節の翻譯を手懸けたからかういふ藝當が可能となつたのであり、もし（あり得ないことであるが）『ヘンリー四世』の全譯を試みなければならぬのであれば、とてもかういふことをしてはゐられない。

以上が部分的にもせよシェイクスピアの翻譯に初めて手を染めた私の主張であるが、ここで讀者の反應を想像し、それへの對處の仕方を考へて見ることにしよう。シェイクスピアとその翻譯を種として勝手な氣炎を上げるため、試譯といふ名の創作的な文章をでつちあげただけだといふ身も蓋もない批評には、どう對應したらいいのかわからないので、それは聞き流すことにする。一方、登場人物を一々譯者の中で濾過させてから譯出するのは翻譯に要する時間が長くなり過ぎて實際的ではない、といふ批評には理がありさうに思はれる。他の如何なる事柄もさうであるやうに翻譯においてもスピードは重視されなければならない。『ヘン

リー四世』は一部と二部を合するとシェイクスピアの作品としては長い方であるが、それでもこの程度の長さの戯曲の翻譯に一年も二年も掛けることには私自身反對である。それではどうすればよいか。翻譯者における内的作業と翻譯のスピードを兩立させることは彼の技倆の問題であらう。無責任な言ひ方に聞えるかも知れないが、私にはさうとしか答へられない。

最後に打ち明けると私には一つの夢がある。この小論に目を通してくれる人はごくわづかであらうことを思ふ時、この夢の實現が不可能に近いことは認めるけれど、私の氣持としては一般讀者もさることながら特に演出家や俳優に私の試譯を讀んでもらひたいのである。さういふことが假にあつたとして、彼等から、お前の文章は劇場向きではない、これらの臺詞は俳優にはしやべれないと言はれたら、その評言を甘受するより他はない。そうなつたら私の試譯はシェイクスピアの作品名をもぢつて「夏の夜の夢」といふことにしておかう。それと同時に三人のシェイクスピア學者の翻譯への批判の言は逆に批判されるであらう。そのことで私に不足はない。批判は時として何倍もの強さで自分に返つて來る。古言にも「天に唾す」といふではないか。

この小論は資料の蒐集その他で中央大學講師の石原直美さん、及び明星大學青梅校圖書館の賀來祐子さんと太田潤氏の助力を得た。この御三方に厚く御禮申し上げます。

註

底本は次の通りである。

- a 中村光夫「翻譯文學の問題Ⅰ」中村光夫全集第八卷 九十一頁 筑摩書房 昭和四十七年九月二十五日
- b KING HENRY IV, Part II 九十一頁 研究社出版 昭和四十九年九月三十

日・四版

- c 坪内逍遙譯『ヘンリー四世 第二部』沙翁全集第15卷 一六八―一六九頁 名著普及會 平成元年五月二十日・復刻版(原本は早稻田大學出版部・大正八年)
- d 中野好夫譯『ヘンリー四世 第二部』筑摩世界文學大系17・シェイクスピアII 二九頁 筑摩書房 一九九九年一月二十日・初版第七刷
- e 小田島雄志譯『ヘンリー四世 第二部』白水ロブックス16 一三九―一四〇頁 白水社 一九九三年一月十日・第五刷

引用文の確認は右の記述で間に合ふだらうから本文中の註番號は省略する。